

義仲北陸篇七章の考察

——「火燵城合戦」から「篠原合戦」まで——

武 久 堅

はじめに

延慶本平家物語は、「横田河原合戦」で越後の城四郎長茂の会津後退を語ると、すぐ、次のように続けている。

A 北陸道七ヶ国ノ兵共、皆木曾ニ付キテ、従フ輩誰々ゾ。越後国ニハ、稲津新介、齊藤太、平泉寺長史、齊明威儀師、加賀国ニハ、林、富樫、井上、津端、能登国ニハ土田ノ者共、越中国ニハ、野尻、河上、石黒、宮崎、佐美太郎、此等、「牒状」ヲ遣シテ、「木曾殿コソ、城四郎追ヒ落トシテ、越後府ニ付キテ、責メ上リテ御スナレ。イザヤ、志アル様ニテ、召サレヌサキニ参ラム」ト云ヒケレバ、「子細ナシ」トテ、打連レ参リケレバ、木曾悦ビテ、信濃馬一疋ツツゾタビタリケル。サテコソ五万余騎ニハ成リニケレ。「定メテ平家ノ討手下ラムズラム。京近キ越前国火打城ヲコシラヘテ籠モリ候ヘ」ト下知シ置キテ、吾身ハ信濃ヘ帰リテ、横田城ニゾ居住シニケル。

(第三本廿六「城四郎、木曾ト合戦ノ事」の末尾)

人名から判断して、最初の「越後国」は「越前国」の誤りで¹⁾、よってここには、越前・加賀・能登・越中・越後の五ヶ国制覇が一举に叙され、また、最終段階にいたるまで義仲軍勢の一種のロゴマークとなる「五万余騎」の初記述となる。「横田河原合戦」に向かう「白鳥河原」での出陣式では、「二千余騎」であった。よって記述は、二年後の「火打城合戦」を前提とする内容ならまだしも、横田河原直後の状況把握としては先走り過ぎである²⁾。以降の義仲の北陸進撃の成果から見ての叙述であろう。文中の「牒状」を遣わした主体も記されず、「信濃馬一疋ヅツ」の下賜も、固別の事象ではなく不特定伝承の反映であろう。文末に「吾身ハ信濃へ帰りテ」とあるから、義仲は仮に一旦は越前「火打城」近くまで進出したとして、その後、「横田城」に舞い戻ったという物語の設定になろう。

一方、ここからの物語時間の進行は、直後に七月十四日の養和(一一八一年)への改元が記されるから、「横田河原合戦」までが治承五年六月までということになる。七月以降に平家方による城四郎長茂への越後国司任命、十月に諸社の兵革祈願、伊勢大神宮への鉄甲奉納、十一月には、二年続きの大嘗会延引が記され、十二月の皇嘉門院、前座主覚快法親王の相次ぐ死去、法皇の法住寺御所入居記事でこの年が終わる。

巻が改まり、養和二年(一一八二年)は年頭記事から始まる。

一月、先帝高倉の忌月による踏歌節会の中止とその故実。

二月、「大伯昴星を犯す」という天の異変と、これに付随して玄宗・楊貴妃の物語と役行者説話の編入。

四月、日吉社での「如法経転読」、法皇の山門御幸と、法皇の動きに反平家の嫌疑を抱いて騒動を起こす平家方の様相が叙され、同月九国菊地の反乱、諸国からの運輸の停滞と京都の食料飢饉等々。

五月、臨時の廿二社奉幣、続いて寿永への改元。

九月、宗盛の大納言還任と華麗な慶び申し。

十一月、大嘗会で歳末を迎える。

この一年間の記事は、勉強出版本版の活字本でわずかに八頁、かなり大急ぎの、どれも著述記事で編集されている。この一年の、手薄な記事構成は、この物語の成立事情の抱える問題点の一つで、別の観点から組上に上せなければならぬ。

寿永二年（一一八三年）は平家一門には都での最後の新年記事、そして宗盛の内大臣従一位拝任記事へと続き、ここで再び物語は義仲伝承に戻り、「頼朝義仲不和事件」が頼朝、義仲の両面から詳述される。語り本はここから巻七「清水冠者」となる。先の「横田合戦」の段階から二年近くの経過がある。義仲は、信濃の奥深くまで進軍した頼朝を避けて、信濃と越後の境、関山に陣を張ったと記す。文中に頼朝の言辭として、

「木曾冠者、信濃・上野兩國ノ勢ニテ、北陸道七ヶ国打取りテ、既ニ九ヶ国ガ主ニナリテ候。頼朝ハ六ヶ国コソ打チシナヘテ候」

という状況指摘がある。本文は二年前の横田河原合戦直後の状況把握と同態である。物語は義仲の北陸道侵略の様相を一度も具体的に語っていないから物語の上での確認は難しいが、この段階の指摘としてなら一応首肯しうる。

史的状况として、『玉葉』は既に治承五年九月二日、十日に、平通盛が北陸道越前・加賀国の賊徒征伐に出向き、難渋して退却という様相を記している。兼実が北陸道の反乱に義仲の名前を記すのは、寿永二年五月まで待たねばならず、治承五年の段階で通盛の対戦した越前・加賀の賊徒の首班は、『吾妻鏡』養和元年（治承五年）九月四日条の、

木曾冠者、平家追討ニ上洛センガ為ニ、北陸道ヲ廻ル。シカルニ先陣根井太郎（行親）、越前国水津ニ至リテ通盛朝臣ノ從軍トスデニ合戦ヲ始ムト云々。

によつて、先陣として根井行親を差し向けていたことが分かる。延慶本という義仲は信濃国横田城に引き返した、という情報は正確である。

物語はここから、表題に掲げた義仲北陸篇七章にはいる。「清水冠者」事件に続く、延慶本の次の七章である。

第三末 八「木曾追討ノ為ニ軍兵北国ニ向フ事」（北国下向）

九「火燧城合戦ノ事、付ケタリ斉明ガ還中ノ事」（火打合戦）

十「義仲白山へ願書ヲ進スル事、付ケタリ兼平、盛俊ト合戦ノ事」（白山願書）

十一「新八幡宮願書ノ事、付ケタリ俱利迦羅谷大死ノ事、併ニ死人ノ中ニ神宝現ルル事」（新八幡宮願書・俱利迦羅落とし）

十二「志雄合戦ノ事」（志雄合戦）

十三「実盛打チ死ニスル事」（実盛最期）

十四「雲南瀧水ノ事、付ケタリ折臂翁ノ事」（雲南折臂翁）

義仲北国篇とはいえ、義仲伝承で一貫しているわけではなく、随所に都方の記事が著述部として編入されている。義仲の北陸進撃の経過は、場面的に唐突な「火打合戦」に義仲の参戦はなく、斉明威儀師の寝返りを義仲北陸路出陣の引き金としている。

そもそも、いかに先陣根井行親の下工作があったとしても、「牒状」が触れ回されただけでは、越後・越中・能登

・加賀・越前の領主階級が一挙に義仲配下に収束するということは、肝心の義仲が信濃に居座って動かない態勢では、成り立ち難い設定であろう。

さて、延慶本は右記の八「北国下向」の章で、義仲配下の北陸勢を再度列挙をする。

B 義仲此事ヲ聞キテ、我身ハ信濃ニ有リナガラ、平泉寺長史齊明威儀師ヲ大将ニテ、稲津新介、齊藤太、林、富樫、井上、津鯨、野尻、川上、石黒、宮崎、佐美ガ一党、落合五郎兼行等ヲ始トシテ、五千余騎ニテ、越前国火燧城ヲゾ固ケル。

（第三末八「木曾追討ノ為ニ軍兵北国ニ向フ事」の末尾近く）

ここでは義仲について、Aの「吾身ハ信濃ヘ歸リテ」を承けて「我身ハ信濃ニ有リナガラ」と記し、名前で加わるのは木曾から義仲に従う乳兄弟の末弟「落合五郎兼行」で、Aの「五万余騎」は「五千余騎」と十分の一になる。軍勢は前記より簡略、特に稲津新介、齊藤太以下の人物の国名は記さない。

以上に概観するように、平家物語において義仲に加勢した北陸勢の実態は出発点から不明確であった。手掛かりは齊明威儀師と齊藤別当実盛、地域名から呼び起こされる北陸豪族の面々である。

北陸合戦の状況分析については、歴史学の側に、註(2)で触れた浅香年木氏の一連の成果があり⁽³⁾、また登場人物の一人、齊藤別当実盛には、関東方の伝承採取による物語風叙述による奈良原春作氏の『斎藤別当実盛伝―源平の相剋に生きた悲運の武者』がある⁽⁴⁾。本稿では、こうした歴史学や伝承構成の成果を取り入れつつ、しかし解明しておきたい狙いは、平家物語延慶本が北陸合戦を通して義仲の活躍をいかに組み立ようとしているか、この課題に絞られる。物語に表記されている限りの地域名・人名等を手がかりに義仲動向北陸篇の解読を試みたいと考える。

一 北陸道齊藤一族の源平分裂参戦

越中から越前へと展開する、緒戦の火打城合戦^⑤から俱利伽羅谷、志雄、篠原までの合戦は、源平両氏に分裂して戦闘に参加した北陸道齊藤一族の奮戦との関連が濃厚である^⑥。その焦点に位置するのは導入部の齊明威儀師の寝返り、最終段階の齊藤別当実盛最期の物語である。本項では延慶本平家物語の採取した斉明に始まり実盛に終わる、齊藤一族の動向を中心に、その輪郭を押さえる。

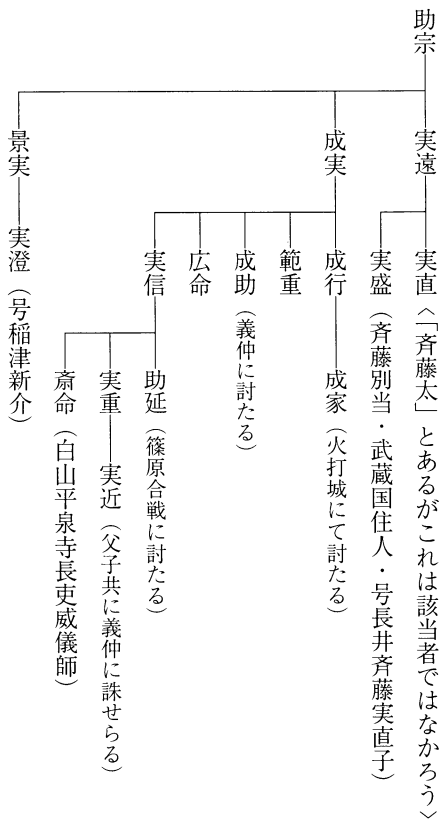
延慶本がその名を最初に記すのは、先に引用したAの「越後国ニハ、稲津新介、齊藤太、平泉寺長吏齊明威儀師」(第三本廿六「城四郎、木曾ト合戦ノ事」と、第三末八「木曾追討ノ為ニ軍兵北国ニ向フ事」の冒頭にある、北国下向の平家の列記に続く、

C 其外畿内ハ、山城、大和、摂津、河内、和泉、紀伊国ノ兵共、去年ノ冬頃ヨリ催集メラレケリ。東海道ニハ、遠江ヨリ東ノ者共コソマイラザリケレ、伊賀、伊勢、尾張、参川ノ者共、少々参リケレ。武蔵国ノ住人、長井齊藤別当実盛ナムドモ候ヒケリ。東山道ニハ、近江、美乃、飛騨三ヶ国ノ兵共少々参リケリ。北陸道ニハ、若狭已北ノ者共惣テ一人モ参ゼズ。

である。Cでは平家方諸国軍勢の参戦が国名中心に叙述されている。AとBは「平泉寺長吏齊明威儀師」を、Cでは平家方として「武蔵国ノ住人、長井齊藤別当実盛」の実名を掲げている。「火打合戦」の斉明の寝返り物語、「篠原合戦」の実盛最期は、編者の構想ではそれぞれこれらの場面から開始していたのである。(実際は「火打合戦」「篠原合戦」の主要人物なるがゆえに、編者はこの二人に限って、実名をここに先行投入しておいたのであろう)。

そこで彼らを『尊卑分脈』藤原氏鎮守府將軍利仁の裔、越前国押領使則光系譜から、その孫・河合齊藤豊前権守助

宗を起点に、一族内での関係をたどることにする。「実盛」は、系図上では、助宗の長男左馬允実遠の次男として位置づけられているが、同時に傍書には実際は系図上の兄に当たる、武蔵国住人長井居住の齊藤実直（齊藤太）の子という傍書がある。つまり祖父の猶子となって実父の義弟扱いとする。実遠の代から武蔵国長井の居住であったものと考えられる。平家方に寝返る「斉明威儀師」は、同じ豊前権守助宗の次男、左兵衛左衛門尉成実の子である滝口武者所実信の、系図上で六男である。「実盛」と「斉明」は、前者は武蔵国居住、後者は越前国在住ながら、越前の河合齊藤一族としては、ふたいとその関係にある。義仲方の「稲津新介」は同じく助宗の三男景実子の稲津新介実澄で、実盛とは系図上は従兄弟の関係にある。三者の関係を簡略化して示すと次の通り。



傍書を括弧内に補ったように、この三兄弟の「実遠」と「成実」の子息たちで、平家方に与して、「火打城」「篠原合戦」等で「義仲に討たれた」と傍書のある者は、「実盛」「成家」「成助」「助延」「実重」「実近」の六人を数え、「篠原合戦」で捕虜となる「斉明」を合わせて七人の犠牲者が出る。延慶本は彼らの敗死に至る伝承を入手するには至っていない。都の物語作者たちに採取されるだけの合戦伝承に成長していなかったのであろう。これを延慶本に照らすと、「斉明」の行動については、

源氏ノ大将、斉明威儀師、平家ノ勢十万騎ニ及ブヨシヲ聞キテ、叶フマジトヤ思ヒケム、忽ニ変心アリテ、我城ヲ責メケル。

とあって、斉明が平家方へ射掛けた「暮目」に付した密通文に、

「斉明ガ一党ハ五十余人候ヘバ、城ノ後ヘ一手ニテ落ち候フベシ。敵カトテ、クラマガレニアヤマチ給フナ。ヤガテ御方ヘ参リ加リ候フベシ」

と記されてあったという。ここにいう「斉明ガ一党ハ五十余人」こそは、右記系図にみる「成実」の子息、孫たちに違いなく、白山平泉寺の長吏威儀師は、その威勢の故にこの係累を采配しえたものであったろう。「北陸道ノ案内者、斉明仕ラム」という斉明の背後を支えたこれが一族の実態である。結果的に火打城で従兄弟「成家」を失い、続く合戦で伯父「成助」、兄弟「助延」「実重」、甥「実近」を次々に戦の犠牲とすることになり、本人もまた「篠原合戦」で捕囚となり、都に引かれて六条河原で打ち首となる（第四・十九「水嶋津合戦事」の末尾）。

一方、義仲方に属した三男「景実」の子息たち、「号・稻津新介実澄」の一族には戦死の傍書のある者はいない。

ただし「稲津新介」は先に引いたA、B二つの本文に「稲津新介」とのみ紹介され、「実澄」の実名はなく、物語はその後のこの人物に触れることはない。『尊卑分脈』は「越前介」、出家して「如経」と記す。「稲津」は越前国足羽川流域を拠点とする「稲津保」として、『吾妻鏡』にその保名の見える地域で、今日は福井市内に位置する。子の一人「範宗」は都で蔵人所雑色から後白河院亮子内親王に取り立てられ、殷富門院蔵人・石見守に任じられたが、後に後鳥羽院方から承久の乱に参戦して斬首の憂き目に遭う。兄弟の「範忠」「範能」ともに都での活躍場所をえている。同じく義仲方から参戦して備中国住人妹尾太郎兼康を生け捕り、後に逆に山陽路の征戦で兼康に殺される倉光六郎成澄も加賀齊藤の流れに属する林の系譜に繋がりが、所領横江庄を白山権現の神領に寄進する林六郎光明とは従兄弟に当たる。越前齊藤はこうして義仲方、平家方に分派して北陸路の合戦に命運を分けた。

本文中に「斉藤太」とある人物については、『尊卑分脈』には「実直」にその傍書があるが、既に高齢の実盛の父が、この合戦に臨んでいたとは考え難いので、該当者不明とするほかない。これもまた北陸合戦記事の不正確さの例証となる。

最初に訂正したように、斉藤党諸流祖則光以降、彼らは「越前国押領使」をもって任じ、鎌倉、室町、江戸期を通して越前国足羽郡を本拠とする一党で、稲津町は現代は福井市に属する。Aの本文は当然「越前国二ハ、稲津新介、斉藤太、平泉寺長吏斉明威儀師、加賀国二ハ」と続かねばならない。とすれば、延慶本は、義仲従輩を「越前、加賀、能登、越中」と都から北陸道を下る道筋に従い記し、横田河原合戦の成果として「越後国」は横領済みで、義仲の北陸道七ヶ国制覇で言及されないのは、「若狭」「佐渡」の二国ということになる。延慶本・長門本が共に「越前国」を「越後国」の誤記を継承するのは、これらの伝本における北陸認識の問題点といえる。

二 実盛、北陸出陣の経緯——「錦の直垂」

平家物語と『吾妻鏡』では、「富士川合戦」前後の記載に、実盛に関して齟齬のあることはよく知られている。また、平家物語と源平盛衰記においても、実盛と義仲との関係設定に濃淡がある。異なる書物に名を留める同一人物を、一つに引くため史実や実態を抽出し得るほどに、各テキストの記載事実は十全な資料批判に耐えるものとは評価しがたい。むしろ一つ一つのテキストが、いかなる実盛伝承を採取しているか、その結果それぞれがいかなる実盛造型を意図したかを、その立場に立って認識することが肝要に思われる。初めに延慶本を取り上げる。篠原合戦の締めくくりに実盛が「錦ノ直垂」を着用した謂れが語られてある。

錦ノ直垂ヲ着タリケル事は、実盛京ヲ打立チケル日、内大臣ニ申シケルハ、「実盛東国ノ打手ニ罷下リテ候ヒシニ、一矢モ射ズシテ、蒲原ヨリマカリ上リテ候ヒシガ、実盛ガ老ノ恥、此事ニ候ト存ジ候ヘバ、今度北陸道ニ罷下リテ候ワムニハ、善悪生キテ返リ候フベカラズ。年ハマカリヨリテ候ヘドモ、マツ先カケテ打死ニ仕リ候フベシ。其レニ取リテ、実盛元ハ越前国ノ住人ニテ候ヒシガ、近年、所領ニ付キテ、武蔵国ニ居住仕ル。事ノ譬ヘ候ヘバ、故郷ヘハ錦ノ袴ヲ着ヨト申ス事ノ候ヘバ、今度最後ノ所望ニハ、錦ノ直垂ヲ御免蒙リ候フベシ」ト申シケレバ、内府「左右ニ及バズ」トテ免ゼラレケル間ダ、直垂ヲキタリケリ。是ヲ聞キテ、大名小名皆鎧ノ袖ヲゾヌラシケル。

（第三末十三「実盛打死スル事」）

この部分は、場面的にやや不可解な設定になっている。直前には先ず、実盛首の洗髪場面があり、「サテコソ一定長井齊藤別当実盛ガ首トモ知りニケレ」と結ぶ。ここまでは伝承物語で、一場は、義仲と実盛首を持ち込んだ手塚太郎光盛と首実檢の証人に呼び立てられた樋口次郎兼光、加えて成り行きを固唾を飲んで見守る義仲郎徒が周囲を取り

囲んでいたであろう。本文はこの後に、対句仕立ての著述部（彼ノ商山ノ四皓ハ」云々）が入り、続けて引用場面、即ち都出立に際する実盛と内大臣宗盛の会話の語りとなる。都での両者の会話のこの場での復元は、首洗いの場を取り囲む人々の回想でも語りでもない。物語を組み立てている作者の叙述である。しかし、末尾の一文「是ヲ聞キテ、大名小名皆鎧ノ袖ヲヌラシケル」は首実検の場面に続く叙述である。「大名小名」の用語は、延慶本にかなり用例があるが平家方に使用する例はなく、すべて源氏方の場面のみである。よって実盛の申し出を受け止めてこれを許可する宗盛の回想の中の人々ではなく、「首洗い」を取り囲む義仲郎等たちである。「場面的にやや不可解な設定」と指摘したのはこの故である。言えることは、無理を承知で作者がこの場面にこの回想譚を持ち込んだのであろうということである。その内容は、作者がこれまでに延慶本の中に語って来た実盛の物語を踏まえて、それらと照応関係にあると解釈される。実盛の述懐のポイントは四つある。

- 1 東国出陣（治承四年十月のいわゆる富士川合戦）
- 2 蒲原引き上げ（「老の恥」）
- 3 今次の北陸参戦（討死にの覚悟）
- 4 越前出身（「故郷へ錦」）

先ず最初の「東国出陣」は、第二末廿七「平家ノ人々駿河国カラ逃上ル事」に詳述がある。大將軍惟盛・忠度から東国の「弓勢」について下問を受けて応答する、前半の「親モ死ネ、主モ死ネ、子モ死ネ、従者モ死ネ」はよく知られている。坂東武者の豪胆を語って、そうでなくても軟弱な平家惟盛陣営を散々に脅かす。揚げ句の果てに実盛は、

「〔前略〕カク申シ候へバトテ、実盛落チテ、軍ヲセジト存ズルニテハ候ワズ。恐レナガラ、実盛バカリゾ軍ハ仕リ候ワムズル。サレドモ右大臣殿ノ御恩重キ身ニテ候へバ、キト暇ヲ給ハリテ、今一度見参ニ入りテ、急ギ 帰リ参リテ討死ニ仕リヌベシ」トテ、千騎ノ勢ヲ引キ分ケテ、京エ帰リ上リニケリ。

という、「蒲原引き上げ」に該当する意外の言動に出る。延慶本はこれより先、同じ巻で、平家の東国攻めへの布陣として、頼朝の次のような指令を記している。

又、兵衛佐宣ヒケルハ、「平家ノ嫡孫小松少将惟盛を大將軍トシテ、五万余騎ニテ、上総守忠清ヲ先陣ニテ、齊藤別当実盛ヲ東国ノ案内者トシテ、下ルベキ由風聞ス。同ジクハ甲斐、信濃両国、敵ノ方ニナラヌ先ニ、此ノ河（隅田川）ヲ渡リ、足柄山ヲ後ニアテ、富士川ヲ前ニアテテ、陣ヲ取ラムト思フナリ」トアリケレバ、「此ノ義尤然ルベシ」トゾ、各同ジク申シケル。

（第二末十九「上総介弘経、佐殿ノ許へ参ル事」）

「東国ノ案内者」という設定に鎌倉方の描き方と平家方の描き方に全く齟齬はない。また平家方の出陣でも、惟盛・忠度に三河守知度を加えた大將軍三人に、「侍ニハ、上総守忠清以下、伊藤、齊藤、官アルモ官ナキモ数百人、其ノ勢三万余騎ヲ向ケラル」と記された、「齊藤」は実盛であろう。これだけの大任を負つて東国出陣に向かいつつ、敵陣を前に千騎を引き連れ戦陣を離脱するという行動は不自然である。しかし延慶本の四つの記事（篠原・富士川・鎌倉方・平家方）の設定は見事に照応している。不自然な実盛の行動叙述には三つの破綻がある。一つは「大名小名」の場面設定の不合理で、その二は実盛退却言上の出だしの言葉、「カク申シ候へバトテ、実盛落チテ、軍ヲセジト存ズルニテハ候ワズ。恐レナガラ、実盛バカリゾ軍ハ仕リ候ワムズル」の菌切れの悪さと、どのように振る舞おうとす

るのか、その意味が不明であるということ、前半に説いてきた東国武者の心意気は陰を潜めている。その三は、「サレドモ右大臣殿ノ御恩重キ身ニテ候ヘバ、キト暇ヲ給ハリテ、今一度見参ニ入りテ、急ギ帰り参リテ討死ニ仕リヌベシ」という「右大臣」宗盛の設定である。「右大臣殿ノ御恩重キ身」の史実実態解明はできないが、「富士川」の時点は清盛実権下で、しかも実盛一族が関東に拠点を形成したのも、清盛時代であつて宗盛の政権下ではない。にもかかわらずなぜここで実盛はかくまで宗盛の「御恩重キ身」を強調するのか。北陸出陣は清盛没後である。宗盛の許諾を得て「錦」着用にあづかる。この「錦」の最期組み立てに合わせた、「右大臣の恩顧」発言と、真意不明の「蒲原引き上げ」敢行という、かなり強引な「雪辱」の設定ではあるまいか。

次に『吾妻鏡』治承四年十二月廿二日の記事を取り上げる。京都より鎌倉に参上した里見太郎義成が駿河国千本松原で、上洛の長井齊藤別当実盛及び瀬下四郎広親と行き会い、両人が次のように語つたという。

「東国ノ勇士皆武衛ニ従ヒ奉リ了ヌ。ヨリテ武衛ハ数万騎ヲ相引キ、鎌倉ニ至ラシメ給フ。シカルニ我等二人、先日平家ノ約諾ヲ蒙ル事アルニ拠リ上洛スルノ由」コレヲ語り申ス。

この記録に基づく、実盛の上洛の時点は富士川以降ということにならざるをえず、実盛に負目があつたとすれば、恩顧のある平家の、東国進攻に馳せ参じ得なかつたという「不如意」と、「平家ノ約諾」という文言に平家の知遇の厚さが語られてあるということになる。

両者を突き合わせると、延慶本の1「東国出陣」2「蒲原引き上げ」は、4「故郷に錦」設定の前提となる作者の「仕組み」で、北陸合戦における実盛最期の一つの主題「故郷に錦」を持ち込むための作為と解される。しかもその「故郷」は単に先祖の地ではなく、彼が直接向き合う同族という対戦相手を前提とすることは先に考証した通りであ

る。

以上が、延慶本が持ち込んだ実盛「故郷に錦」参戦までの経緯とこの主題の展開のために弄した作為である。

なお延慶本で「錦の直垂」を着用して描かれるのは、平家では父子対決の清盛と重盛、東国出陣の惟盛、北陸出陣の平家公達六人で、本文で実盛の言葉伝承に採られる「故郷へハ錦ノ袴ヲ着ヨ、ト申ス事ノ候ヘバ」の「錦ノ袴」をそのままに演出するのは、延慶本巻末に『六代勝事記』を出典とする「征夷將軍右大将頼朝」の入洛の場面一つである。漢籍で管見に触れるものは、『通俗編』（祝誦）にみるように「錦ノ衣」となっており、和書でも『唐物語』（第十九話）の「朱買臣」などは単に「錦を着て故郷に帰る」とあり、実盛言葉伝承の「錦ノ袴」と符合するのは、調査は不十分ながら、頼朝入洛の光景を叙述する『六代勝事記』とその引用、実盛の三つである。実盛の言葉伝承も、延慶本の段階で表現が改作された場合も考慮される。

いずれにしても、実盛「故郷に錦」は、実盛最期には第二の主題で、本来の主題は、義仲を引きずり込む「染髪と洗髪」の物語、実盛の心情吐露に従えば「老苦」に集約される。

三 「老苦との戦い」

実盛物語の本来の主題は「老苦」、厳密には実盛の「老苦との戦い」である。延慶本の作者は、物語構成の手法として、しばしば採取した伝承譚に独自の著述部を挿入してその主題の在りかを開示する。実盛染髪に至る心情は、「古同僚」樋口次郎兼光相手につぶさに語られてある。

始めに義仲の乳兄弟の一人中原の兼光にとって、実盛がなぜ「古同僚」（国会図書館蔵長門本は仮名表記・ふるとうれい、源平盛衰記蓬左文庫本は振り仮名・イニシヘドウリヤウ）であったか。

「同僚」は延慶本の場合、渡辺党の「競ノ滝口」に、地の文と競の言葉とに二度使われ、また「宇治川先陣」の梶原景時の言葉に二回あり、いずれも、共通の主仕える武者仲間との関係を意味している。実盛の主が平家であつたろうことは動かないとして、兼光に平家従属時代をどのように想定すべきかは難しいが、その父兼遠が、義仲養育の疑念を受けて平家から呼び立てを受けて都に出頭する場面があるから、父子ともに表向きの立場は平家従属の、ここで言う「古同僚」に当たるのであろう。或いはまた延慶本が示唆するもう一つのポイントとして、義仲没後の「樋口次郎降人ト成ル事」（第五本十）に、兼光を包囲した坂東武者「児玉党」から投げかけられた次の言葉、

「樋口ハ児玉党ノ聲（原本「声」、誤字訂正）ニテ有リケレバ、ヤ、殿、樋口殿。人ノ一家ヒロキ中ヘ入ルト云フハ、カカル時ノ為也。軍ヲバトドメ給ヘ。和殿ヲバ御曹司ニ申シテ助ケウズルゾ」

が参考になる。樋口をここに「児玉党ノ聲」と呼ぶ。「一家ヒロキ中」という通り、武蔵七党の中にあつても最大を誇る大豪族で、樋口兼光がその内の何者の子女と縁組していたかは解明できないが、この呼び掛けを前提とすると、義仲が「古同僚」と呼んだのは、乳兄弟兼光の婚姻関係を踏まえる坂東との関係と解することもできる。

この物語に延慶本は二つの著述記事を付加する。一つは兼光の回想に出る実盛の言葉の締めくくりに置かれる俊成の和歌、

沢ニヲウル若菜ナラネドヲノツカラ歳ヲ積ムニモ袖ハ濡レケリ

である。「小野小町ガ老苦ノ歌」として援用する。実盛の言葉を復元して伝えるのは「古同僚」樋口次郎兼光であ

る。実盛の「老い」の述懐の言葉に、出典とする『長秋詠藻』俊成の和歌を、小野小町と語つて引用するというのは、真性の実盛言葉伝承とは考えがたい。「老苦」の評語がこの和歌に当てはまるか否かは問わないとして、延慶本のこの場面の構成者は、実盛の心境をこの評語に託したのである。

首洗いに続けて、作者は、

彼ノ商山ノ四皓ハ、頭上ニ霜ヲ戴キ、速ヤカニ高山ノ奥ニ隠レ、此ノ齊藤別当ハ、白髪ニ墨ヲ塗リテ、永ク冥途ノ旅ニ赴ク。
彼賢才能潔ナルガ故ナリ。此ハ武勇ノ至リテ甲ナルガ故也。昔ノ許由ハ耳ヲ洗ヒテ名ヲ後代ニ流ス。今ノ実盛ハ髪ヲ濯ギテ涙ヲ万人ニ催ス。

の著述部を編み込む。その姿を「商山四皓」、即ち商山隠士（東園公・綺里季・夏黄公・ろく里先生）の「鬚眉皓白」の老人に对照させて、「白髪ニ墨ヲ塗リテ」と描写して、「永ク冥途ノ旅ニ赴ク」と叙す。「此ハ武勇ノ至リテ甲ナルガ故也」と讃え⁽⁷⁾、併せて「今ノ実盛ハ髪ヲ濯ギテ涙ヲ万人ニ催ス」と、その心意気に共感の涙を添える。なお、延慶本はこの「商山の四皓」を隠徳の理想と捉えていることは、清盛による後白河院鳥羽殿幽閉の事態を聞く「古キ人」殿上人（宰相成頼・民部卿親範・左大弁宰相俊経）等の隠棲を「商山ノ四皓、竹林ノ七賢」に準え、遠藤武者盛遠入道の山岳修行を「彼ノ商山ノ翁」に類比して叙し、その「勸進帳」でも自らを「商山洞ノ苔ヲ敷キ」と語らせ、或いはまた惟盛高野詣でにおける「滝口入道の庵室」描写でも、「四皓ガ住ミシ商山、秦ノ七賢ガ竹林モ、カクヤアリケム」と叙述する。「老い」を迎えた「賢才能潔」の身の処し方の理想を彼らに託し、同じく「老い」を自覚した「甲ノ者」の英傑の理想を実盛に見る。

なお、場面の前半は対戦した信濃国諏訪郡住人・手塚太郎金刺光盛の報告で、その文言には、「エゴヘヲ出シテ引

クニ、鑑ヲコシテ先ニ落チニケリ」の「エゴエ」、「西国サマノ御家カト思ヒ候ヘバ、音ハ坂東音ニテ候ヒツ」の「坂東音」は、ともに延慶本の中で孤例の表現で、後半の義仲等の眼前に展開する首検証の場面でも、義仲の文言の、「ヲサナメ（幼目）」「シラガカスヲ（白髪糟尾）」、樋口次郎兼光の文言の「老武者」、叙述文の「シラガフウキ（白髪吹雪）」はいずれもこのテキスト内には用例のない表現で、物語本体の伝承性の一つの左証であろう。

四 義仲と実盛の接点

最後に、義仲の「一年、義仲ヲサナメ（幼目）ニ見シカバ」を考える。義仲が二歳の年に母親に抱かれて木曾へ越えたことは延慶本の設定である。この時の記憶ではあり得ない。これより「ヲサナメ（幼目）」といい得る少年期までは基本的には木曾育ちである。元服後の青年期に東信濃は根井の元に移籍されたこともこの物語の設定であるが、幼目という表現の年齢を超えるであろう。実盛は武蔵国から東山道を往來して都の平家に出仕し、道中木曾路では中原兼遠に一言の挨拶があつたとして、その頃の記憶でもあろうか。しかし既に引いた『吾妻鏡』で、東海道を往復する実盛は確認できるが、東山道往復については裏付けは取れない。

他方、実盛が手塚太郎光盛と向き合つたとき、「口首ヲ打チテ源氏ノ見参ニ入レヨ。木曾殿ハ御覧ジ知リタルラン」と言い残してもいる。実盛は光盛相手に義仲を「木曾殿」と呼ぶ。一つの物語中の出来事であるから、当然といえば当然であるが、義仲の側からも実盛側からも両者は既知の關係として設定されているということは符合している。

源平盛衰記は両者の關係を大胆に作り替える。後世『盛衰記』による両者の關係伝承が流布するので、その趣向に目を通して置く。次の言葉は首洗い後の義仲の述懐である。

木曾宣ひけるは、「親父帯刀先生をば悪源太義平が討たりける時、義仲は二歳に成りけるを、畠山に仰せて、『尋ね出して、必ず失へ』と伝へたりけるに、『如何が稚き者に刀を立てん』とて、我は知らざる由にて、情け深く、此の斎藤別当が許へ遣して『養へ』と云ひければ、請け取り養はんとしけるが、七箇日置きて、『東国は皆源氏の家人也。我人に憑まれて此児を養ひ立てざらんも人ならず。育ひおかんもあたりいぶせし』と案じなして、木曾へ遣はしける志、偏に真盛が恩にあり。一樹の蔭、一河の流れと云ふためしも有るなれば、真盛も義仲が為には七箇日の養父、危ふき敵中を計らひ出しける其の志、争か忘るべきなれば、此の首よく孝養せよ」とて、さめざめと泣きければ、兵共も各袖を絞りけり。

（卷第三十「真盛討たる、付けたり朱買臣、錦の袴、並びに新豊県翁の事」）

乳幼児期の信濃逃避の幫助者として実盛を設定している。出来事の経緯は必ずしも明確とはいえないが、大蔵館から消えた義仲の探索を命じられた畠山重能が、温情から義仲を実盛の手に預け、預かった実盛は七日間の養育の果てに中原兼遠に託したという。実盛を七日間の養父にして命の恩人として登場させる。坂東の十賢人とも評さるべき畠山重能を介在させるなど、この設定もかなり手の込んだ仕組みである。時代状況に無理のあることは、実盛のいう「東国は皆源氏の家人也」に顕著で、悪源太義平が叔父義賢を襲った段階はとてもそうは言えない。畠山の登用も時代状況にあわない。延慶本の「幼目」の表現の背景に、『源平盛衰記』の「七日間匿い」という伝承が作用していなかったとは言い切れない。畠山と実盛の周辺には、義仲信濃逃避を巡って、比較的早くから、その幫助者伝承が形成されていたと推察させるこれは一つの痕跡である。ただしそうであつたとしても「幼目」の成り立つ年齢ではない。

こうして「老い武者」の述懐条件は整備され、義仲の「幼目」の記憶「白髪糟尾」から、「古同僚」兼光による実盛言葉伝承の復元を経て、衆人環視の中での「首洗い」のパフォーマンス、「白髪吹雪」の現出という、一連の「老苦」実盛の物語はその状況設定を整え、義仲北陸篇七章の末尾を飾るに相応しい、義仲三十年の生涯を圧縮するに足

る情実溢れる物語となったのである。

註(1)

「長門本」もこの部分は「越後国」で、『源平盛衰記』はその誤りを正して「越前国」に改める。

- (2) 浅香年木著『治承・寿永の内乱論序説』（北陸の古代と中世2）（法政大学出版局、一九八一年（二月）一七〇頁にも、「横田河原の合戦の直後に、北陸道南西部の在地領主群や白山宮の衆徒・堂衆・神人集団が、一斉に義仲に従ったとは考えがたい」との指摘がある。

- (3) 浅香年木著『古代地域史の研究』（北陸の古代と中世1）（法政大学出版局、一九七八年三月）『中世北陸の社会と信仰』（北陸の古代と中世3）（同、一九八八年四月）

- (4) 奈良原春著作『斎藤別当実盛伝―源平の相剋に生きた悲運の武者』（さきたま出版会、一九八三年五月）

- (5) 火打合戦については既発表の、武久堅「延慶本平家物語の「火打城合戦」―巖島明神の託宣」と「平家衰亡の予言」と」（『人文論究』五四巻四号、二〇〇五年二月）がある。

- (6) 延慶本の表記に従い「斎藤」の文字を用いる。

- (7) 「此ハ武勇ノ至リテ甲ナルガ故也」の評語については、笹川祥生氏の論文「『剛の者』の行方」、に「理想の武人」として平家物語・保元物語・平治物語における用例の系譜の把握があり、その意味付け、解釈の参考となる。（武久堅監修『中世軍記の展望台』所収、二〇〇六年七月、和泉書院）

（たけひさ つよし・関西学院大学名誉教授）